

仕合わせの和



第215号
令和2年. 2. 1
(毎月1日発行)

喪中ハガキ

住職 谷川寛俊

新年早々誠に恐縮ですが、最近、葬儀の簡略化が進み、身内だけで送るという家族葬が増えつつあるようです。特に都会の方が進んでおり、もっと驚くのは直葬（ちよくそう）と申しまして、病院などからお参りもせず、直接火葬場へ・・・という流れです。私はいつも申し上げていることですが、人間世界に生まれるということとは、余程のご縁がなくては生まれることはできなかつたのです。そして私達は選ばれて生まれてきました。又、その人にしか出来ないうものを持つて生まれてきました。更にはこの両親の元に生まれるということも過去世（前世）からの縁があつたからです。

いかなる理由にせよ、一生懸命生きてこられた人が、直葬という誠に寂しい最後は如何なるものかと思えます。話がそれましたが、喪中ハガキを受け取つて初めて親戚や知人の死を知るといふ話を聞きます。喪中ハガキを受け取つた後に手紙や線香などを送る「喪中見舞い」という新しい風習まで生まれているようです。葬儀の小規模化の理由として、弔問者の接待に追われることなく、静かに故人を送りたいという遺族の気持ちは分からなくもないですが、特に大切な人を突然亡くした場合、その死を受け入れられず、うろたえている中で、弔問者に対応するのは大変なことでしょう。何とか身内だけで葬儀を終えても、喪中ハガキを出す時期になると、思い悩む方もいるそうです。また、喪中ハガキを出した後の弔問や問い合わせの中には「なぜ知らせてくれなかつたのか？」と責められたり、「どのように亡くなつたのか？」と好奇心で尋ねられたりするものもあり、辛い気持ちになることとです。友人・知人として、喪中のハガキを受け取つたときの驚きや寂しさも分かりますが、遺族とのやり取りには

真成寺ホームページ

<https://bit.ly/2Gz55Mz>

編集・発行
玉蓮山 真成寺
編集部 谷川久仁子

TEL・FAX 0765-22-2268

携帯 080-3744-2523
こちらの番号でも
お寺につながります。

気を遣いたいものです。

日蓮聖人が晩年の『重須殿女房御返事（おもすどのにようぼうごへんじ）』の正月五日付けで、年賀状とも言える書状です。

「正月の元日は、日の始め、月の始め、年の始め、春の始めです。この日を大切にする人は人徳を積み、外には人から敬愛されるでしょう」と、供養の品の札状に添えて、新たな年を迎える心構えを伝えた後に、「そもそも地獄と仏は何処にあるかと問えば、自分の身体の内にあるのだと経文にあります」とある。このお手紙の受取人「重須殿女房」は、娘と夫を亡くした後、尼僧になつた女性です。この時も娘を失い、心の地獄をさまよつていたのではないのでしょうか。日蓮聖人は更に続けます。「禍（わざわい）は口より出てて身を破る。幸いは心より出て我をかざる」と。正月の始めに法華経を御供養しようとする御心は、木に桜の花が咲き、池に蓮華が蕾（つぼみ）をつけ、月が

山から出るように、あなたの中の仏を輝かせることでしょうか。自分だけが不幸だと思ひ込み、暗く沈んでいた心から出た言葉や行いが地獄をつくつていたのだ。亡き娘と共に、お題目を唱え、心を養い、花を咲かせていこうと、重須殿女房のしんの扉が開かれたことと思えます。喪中ハガキにどう向き合うか、相手の思いにどう寄り添えば良いか慎重に考えなければいけないと思えます。

